伊地知文庫
文庫20
215

文庫20
215

二条殿康道公 古言抄 下巻

○古言抄

二 四季詞

四 非季詞

五 神祇

六 釋教

七 述懷

八 義傷
九 山類
十 水邊
十一 躰用〻物
十二 可隔之句物
十三 可講立句物
十四 可隔七句物
十五 一〻面〻姪物
十六 物細〻事
十七 姪詞〻事
十八 可思惟事
十九 數句切字〻〻

十 句数之事
十一 仮名遣之事
十二 執筆之文
十三 一座之法度之事
十四 會席作法之事
十五 倭漢之篇之事

○二 四季之詞

四季とは花郭公月雪なとの類をあつめて
もろもろの物ハ不入 紀霞雪月とて一つゆきならす
元なとを事ハ秋之わすれぬさとも虫 伊呂葉
詞のうらと兼て深くも見てやとかんたなりと

○春 此説ハ神武皇居を治せしとの時より興哉
之事

星をとなふる といふハ四方拝より天子の天地四方を
拝し給ふ事ハ元正寅の時之清涼殿東
庭にての事なりさまさまの作式あまた有となり
略之なり

屠蘇白散

[illegible]

[illegible]

用[illegible]

砂糖 月[illegible]白[illegible]年を[illegible]

腰赤[illegible]

[illegible]

[illegible]

若水 立春

筆[illegible]

白[illegible]節會 [illegible]

若菜 [illegible]

磯菜つび [illegible]

芹蓴 [illegible]

卯杖 [illegible]

賜召 [illegible]

わらはけを　月夜の百首　[illegible]

かけの綿　相模歌の中の書　踏歌　[illegible]

賜ら　月夜　射手のつさうらあるうら

[illegible]

松の花　[illegible]　書　乃緑之　日[illegible]

桂　[illegible]　[illegible]

柳　書とひとしてよ　書

[illegible]

書間　[illegible]　書の名所書の事うと書

[illegible]

[illegible]　書の名所うらは可為書うら

[illegible]

前代　[illegible]　伊保姫　[illegible]

[illegible]の洞　[illegible]　書　書のうらを

[illegible]

祈年祭　二月　大原野祭　二月上卯日

春日祭 二月上申日に春日の祭を行はるる故に春と云ふ

仲の春 南都祭 石清水八幡宮に三月中辰日に天暦五年より始む

曲水宴 のちに三月三日

初春 のちに春の初めの意

白尾の鶯 絶尾の鶯とて羽なきもの

鳴る春 きくに人

梅 梅場の春 梅の香の高い匂ひ

鶯 鶯の音 初音

のどやか 長閑 鶯の鳴く音

若菜 若草 若草を摘む

若紫 紫草の若葉

[illegible]の[illegible]　[illegible]秋[illegible]の[illegible]とり[illegible]
[illegible]の[illegible]　[illegible]の[illegible]の[illegible]
いこと[illegible]　[illegible]海[illegible]
[illegible]の[illegible]　[illegible]
[illegible]の[illegible]　[illegible]と[illegible]
畑[illegible]　小田[illegible]
[illegible]の[illegible]　[illegible]

東風　[illegible]
[illegible]の[illegible]　[illegible]
[illegible]　[illegible]
[illegible]の[illegible]　[illegible]
[illegible]の[illegible]　[illegible]
[illegible]の[illegible]　[illegible]
[illegible]の[illegible]　[illegible]
[illegible]の[illegible]　[illegible]

枯野の霜

花さく

花見

日

續花祭

花の咲はじめ疫神ふせぎとして人々

花

詞の花

心の花

橋梁の花

櫻朝

櫻貝

櫻田

遠日

櫻

霞

あるかたに霰は秋に冬に秋の部に入れて春
にも入れり和漢共に春も冬も入れり
絶の霰のきつきにありて春に入るなり
此外也

かけろふ とのゐ羽春にかよひて ともいふとも背柏の句に
おぼえて一のひとつもいひし人あり春の句会にて一年の
ことをもいへしありかたに一年を春にいれるなり
此外也

又 はまた春なり 紀之すなる さくら人に こそ花もあつたかなる すこしそれて春なり

三冬つき かへりても春也 春は冬にいれとも 春の夜のくる すてて 月也

春雨の 春はわたやかにしてたえし それぞれ 此外也

春の日しく もとも月おぼろ春なり 四季ともにたかし かし まで 季 そなへし

夏

更衣 ころもかへのなる四月 錦の事なり

神祭 夜かけての 左の祭に 侍也

大神祭 四月上卯日 三輪明神也

稲荷祭 月日未定

平野祭 四月上申日に遊也 いつくしまるところなり

松尾祭 月日 未定

廣瀬淵田祭　月冥和別命を主とし風水
祭といのる事　祝詞

灌佛　沖原の母屋に山を作り仏の生を作る儀式

吉田祭　月中の丑　月中の申日

賀茂祭　神山の祭の事　月中の酉日　賀茂の御生日

カ八祭と桂とり事　神山の祭と桂とり事　別當祝詞

梯取　文うらうらと梯をうらうと　梯取文

花　花の祭と桂ひて花を　桂　桂をひくし文

卯花　卯花　花　ひとひて部に文

部立　部立の時に用ある　毛かとる書　その紙の毛をとる時文

水無の菓　水無の雜　祝詞

稱川　稱川の祭の事　稱文　稱川　稱の羽くくりさし

獻物　獻物　獻物ひかり

騎射 さしはおそくのれ なりなり　麻子 かくしすてのさくひ 同おなし

鮎 なつはあゆ鮎は春はさび鮎 秋はおち鮎とも 冬は氷魚といふ　道籏すそふ 牛

菖蒲 折端に菖蒲すりいでてもさをさし 端午に六府あやめの臣 と菊華の端の東西にさす事すとあり

くもて山 のてのあふて 木の下藤 草の下藤 似とおなり 春なり

樗

構 とこしの花すとなり

若楓 青楓ハ天好 詞なり

葶藶草の若葉

木のしたや 此折は 草木 わかみとけ多 またいふるい

茂りあふ 林の下藤うつふ またしてもうつたり さつわさ 夜なり

瞿麦の草薹 ときもさけ とりては たなつなり 末志けし花

蓮 くて若葉すとさてに うちくつなり うけつつなり 忍草の花 花こく雑

青すの草 ゆかすその中すまわ 別の及哉く 杜若 哥ニ 春 すなり

うそしこ 日石作

和布苅

海こと弁　なこたく海こと

藻の花　うき草の花

海松　うみまつのこと

むもく蔦

くちなしの花　梔子

梅雨　つゆ

夕立

雲の峯　茅風

砂金の雪

汗　わせはて

抵掌會　育ちこ水の代のいい坂のこと

凉　ト云何清き事ひうていこと心初

清水　ひとしくせくと

浮草花　日月草

田草水

梔子の花

烟

[illegible]

月の海き [illegible]

明やとぬみの [illegible]

[illegible]

[illegible]

みる月人の [illegible]

[illegible]

柳葉の物とぶらくあるの [illegible] 百官集義門に集りて柳しるとうの

秋

一葉ちる 一葉ちる [illegible] 柳ちる初秋 [illegible] 柳相 [illegible] 初秋

桐の葉ちる 桐の葉ちる 秋

若木のちる 若木のちる 秋

初風 [illegible] 秋

わつらひ [illegible] 秋

星合の詞 星まつる [illegible]

紅葉の橋 [illegible] 二百二十四 [illegible]

玉河 [illegible]

[illegible]巧奠 [illegible]

[illegible]の糸 [illegible]

秋[illegible] [illegible]

[illegible]蘭盆 [illegible]

秋[illegible]鶏 [illegible]

鶏 [illegible]

小[illegible] [illegible]

[illegible] [illegible]

鶏の[illegible]

[illegible]

[illegible]

相模　七月十五日合月サいろう　桜おおの
ものうの年中行事にて高わう

小野祭　弱冠　詠田舟

萩戸　月萩後萩と桜られ不可思いろう清水後の
小の方二万のあのうえうえうう

芭蕉　蓮月ろうやたうしうの表列に万及
成くる程と秋をいろう

蘿蔔蘭　いつまで秋うちの秋の草とし不
一倍計

落ちる　うしうう
秋うう　濱萩　秋の

ちうけ草　ちう新草
あ程し

実治の花園　教　教生　月い情うう

実乃花　いろいろ新うう
秋うう

物語　月まの事うの事ともしか所にして用事
いとう

望月弱　信法の勅使く弱家く俗武弱
おられ月まりうう

きうちう弱月　中俗弱家　月十七日

武蔵野部　月部

月のさやけさ　月のあかこのあり

月に樣の花　さくらの花としても秋

月日とはるかなる　秋月の月日の

星月夜　月のなかい　書の文　さくらとても秋

中秋　中秋の月　夕涼月　中秋

いなむしせる　そのむしの音　四　ちるさくら

病　ものさびしき　秋　月　ものをひとりとても

病　秋　秋の病の病　不得起居の

略　ものこしきの　ものうとても秋　鶯　鶯

椎　秋　あきうり　椎　月　月　秋

椎　秋　あきうり　不得秋

椎葉　しいば

楓　かえで

忘草　わすれぐさ

梨　なし

柞　ははそ

秋の夜　あきのよ

菊の白綿　きくのしらわた

野宮御稜　のみやごりょう

いくしまやま　いくしまやま

鳴虫　すだく

秋人の手うり　あきびとのてうり

暮雲藻　ぼうんそう

御燈　みとう

天子の小辰の祭　てんしのこたつのまつり

重陽宴　ちょうようのえん

菊花の酒　きくのさけ

殘菊　のこりぎく

伊勢奉幣　いせほうへい

紙もしめ　かみもしめ

四草　四季草の地

柏野　かしわの

ひとつのくい　ひとつのくい

月草　露草　ツユクサ

霜　霜の白きいひてもかくれ

小田刈る　小田刈る

稲妻　稲妻のひかりにかくれ

かりそめ　かりそめの

萱草　萱草

胸騒　胸の騒ぎ

紅葉　紅葉

冷　冷

露霜　露霜

露の　露の

衣　衣の袖の

衾　露すと結びては秋也　但露のふんそくにそせ　薜ヒサゲ又ハツタトモヨム　ちるとも云ともすくても秋なりつる草の花

かつらぬきや松の一りし　きいは朝夕の秋なり　冬と云字入ては冬也　松　如何

紅葉のちるは冬也　雪霜を結びては秋なり　如何　の名所ちるをりしきらひなり

川のもみち　折ふしては秋らしく　冬はなるべき　とりては　いろといふ

紅葉の色も枯る　すりてても秋なりての文　は落し物語秋なり

紅葉をちる　秋也　木のくもちかれた　冬落葉とも云て　ちるにまじく

菊　菊のうつろふ　冬の部にて　又秋を結びて　名をば字入ては秋なり

かつらし菊　菊の露　菊をひてもみうつろふ　ちるをとりて　秋なり　冬さるらやらは秋なり

月　冬さる秋なり

月のさゆる　月よそて秋なり　菊も冬

月の霜　冬なり　霜の消ると　冬なり

初雪見ん露　桓武天皇延暦年中より　まるなり

初霜の消る　さても冬　こ煙差なり　露きゆる　きても月秋

[illegible]雪 [illegible] 漢雪 と云うう

浪の雪 西方に降る 富士乃初雪 [illegible] 二用

[illegible]

霧の中に消るとなしと云うう

落氷 白海[illegible]

[illegible]月[illegible]十月[illegible]

氷[illegible] [illegible]

[illegible]

新嘗會 十月中の卯日

[illegible]

豐明節會 十一月中ノ辰日[illegible]

[illegible]

[illegible]の[illegible]

[illegible]大嘗[illegible]

[illegible]

[illegible]

小祭 [illegible]

[illegible]

日蔭糸 [illegible]

[illegible]

小忌衣 [illegible]の神[illegible]

[illegible]

星形樂

形樂

求子

麻尖

網代

氷魚

摩材

特場の雑

食

炮尖

綿

内侍所御祈禁 十二月十日

荷前使の宣旨 十二月十日

仏名 十二月十五日より

年末 年内

年内立春 立春の日

非参議 非参議に参議を補す

板方祭 一七年太変

神 新しく造る社

藤原の文 他姓の文

新叙

業平の祭

法の師 格式の事

新叙

法の師 法華の師

法華の師

ありあの月 心月橋のこと 月日 とつきたる絹月日
のさとり所なれば新し
春のうき橋 手毛〻 わたりて いかのり 春よりも わたりて
備なる木 同ごとく此地名類なり 美濃山 石河
葦垣 葛木 真金吹 綸麻河 奥山
浅緑 沢田川 竹河 武生 河口 倉垣
鷹山 田中 井戸 鏡山 高島 婦門

大宮 長浜 此と 呂なり
総角 高砂 貫河 飛鳥井 東屋
走井 伊勢海 蓬生 我門 大芹
浅水橋 大道 美濃 遠江 何為
道口 西寺 鶏鳴 難波海 浅也
此之律なるも皆さいばらのうたの地名なれば
見を略まで此之准らし

[illegible]

[illegible]

松のみどり　[illegible]

松乃落葉

花　花とみるまでもなく

花の葉と　つるもの

初新

柏　このてがしわといひてもしかるべき

[illegible]

青葉　花と結び入てもいはれる

木の葉　星　この[illegible]

竹の落葉　新[illegible]

山橘　[illegible]

蓬　蓬茅　[illegible]

紫草　[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

野の[illegible]

牽牛花 ともやうすと云 羽出て仏の卯也 波の花 白の仕立による 夏にもあらし

野様 雑し 志賀の山越 月并

庭の雨 前川に雑する手すみの園のうそのをすて いつく夏より他はなく

清水 と斗は雑するも 是を以て夏也 手むすふ 勿論雑

水宿 月并 野鷹 雑也

鶴 鶴すくの羽毛ふし 鶴の子も此外夏はなく

鷄の巣 杉むしく子

海月 杉むしく 海草 むささひ

つけて 雑するけれとのものゆるとされは夏也 此の かしらは枕よるへきよりて雑氏雑

藻をしほ けうらふ

麻の園 仏の法ととかれし麻 秋也園の事ならん なけさして

猪 狐ときえりのそよき雑 のけくの夏也 秋の暮 のえきりの夕 わりとく

眉毛霜 月并 篝火 雑にても思ひ物ならぬ今夜を云り 六十ある雑ところ

丹波風　[illegible]

かくだん　[illegible]

五　神祇　神示之[illegible]

天鈴戸　い恐鏡　真榊樹　神酒山

神山　野文　鈴の明つく　ちまき

かくうき　板桙　大槌　[illegible]

庭火　[illegible]　[illegible]　[illegible]

[illegible]人の手　[illegible]　小長谷の長

東橋　[illegible]　[illegible]　[illegible]

[illegible]へ沖稜　[illegible]

韓神　[illegible]　前張　[illegible]

六　釋教　[illegible]

鷲峯　我立杣　鶴林　彼岸

家の戸　家を出　彼岸　三車

三世　玄暁　一蓋　[illegible]

じんの玉　常楽　衣玉　山伏

二月の月　六道　胸の月　心月

懐乙　[illegible]

経文　要文　[illegible]

七　述懐　述懐　懐しい　西懐

昔古　老　生死　世　親子　蓮衣

墨染袖　隠家　懐月　寿月　命

[illegible]十二月　[illegible]

述懐　墨染衣　[illegible]

[illegible]　墨染袖　仏中子　衣　脇衣の文　文基　[illegible]

墨海海苔月桂よみの不流新書と栗の如く可
用ゝ也毛今案ずるに出懐に長歌1わゝと添
長方布するに可依白竹也ゝ
なるべし

十二のみ　白髮　うの　鈴のうけ行方
世紙そもしく　紙の新のうら　月　うと云
古の人　ほゝとゝす出懐うゝ　ほゝとゝす出懐ゝ
出懐ゝわゝとゝし飛科ゝ長歌

八幡傷

霞の谷　淀千山　山の嶺ゝ　くゝ
かゝるゝ　新花　新花の樹　主石の中
古枕　古今歌　ほゝとゝす出懐と思と詠して一首
の自ゝ　かゝりのうゝ　紙ゝ出懐のうゝ
ほゝとゝすとゝとゝし古今歌うの打越出懐の自ゝ
紙ゝ出懐ゝ　紙ゝ出懐ゝ
紙ゝ出懐ゝ　紙ゝ出懐ゝ

九　山歌　峯花ゝ　不及歌
山姫　山人　仙人　山ゝとの歌

山梨の山　[illegible]

泊瀬寺　唯入左山関　[illegible]

[illegible]の滝　[illegible]

憂の山　[illegible]

浮橋　山[illegible]

松橋　[illegible]

小橋　日おの葛城の岩橋

くらもちの橋　日おの

葛城　[illegible]

松木　松人[illegible]

滝　滝津とはの字[illegible]

雪の山　天竺の[illegible]

山ばとの事のこゝ山ばとわ
和歌

畑山　はたけやま　月名

○非山類分　山類きき初土をうたとのやまとみる

雪山　天竺大雪山の事なれども雪の山人うたやまと

鷲の峯　雪山はたけやまとも

山賤　山がつ　山ばと　仙人　心の字に二百人に月名

山神の言

富士川　富士川　富士の奥をもいふなり

三河　三河に　三河　浮島原　浮島

室乃い河　室乃い河　室乃い河

清瀧河　清瀧河　清瀧河

かとみの関　鈴鹿　鈴鹿関　鈴鹿の関

本書路　吉野乃野　小野山奥　吉野
小野と云て　[illegible]の山里　三船の滝
[illegible]の聖人　小泊瀬　[illegible]
[illegible]の杉　泊瀬　[illegible]
泊瀬川　岩橋　蓮の杖　橋　仙人
岩やき　人伝　[illegible]　日野の山　新つま
[illegible]　未の[illegible]
二句[illegible]
橋　[illegible]
○千[illegible]過　[illegible]
[illegible]の神　[illegible]　橋　姫
月　[illegible]　[illegible]
[illegible]　[illegible]　三船の滝　須磨　明石
松[illegible]　[illegible]
[illegible]　清見ヶ　[illegible]　[illegible]川

清見関 名所てハ清見か関門司関なとあり 海士小舟
浦〻も名所とはいふなり
泊瀬山といひて名所也
淡路 名所にわたら浦といへハ 此名所にあらすなり
田蓑嶋 三嶋 桂川の三嶋のすなり まさきの浦
志賀の一松 すといひてハ名所にも志賀ハ名所に非ス
すゝ佳名所てらすいつとは不撰名所
松嶋 小嶋ホ 塩竈 御裳濯 名所に非名所 とゝ注あり
泊舟 すゝ名すといふなり
浪の花 雑冊にあり
いふといふなり

清水 田井 手洗の水 なといひても名所なり
梅 都鳥 名所 千鶴 千鳥 名所なれと 入待名所也
都の薦蒲 ねこしても名所なれと人の利にあらす
かやうにしても名所ことといふなり
枯蘆 蘆そのれの名所ニわたる故に 名所のゆへにあらす也 古河 中
月のてりか 鏡 名所 五月雨ハ庭て 海なとゝいひても
名所に非ずしや
○非名所分
名所ニ似たる物也哉

難波 月なし

志賀 月なし 都の名所

なぶりとゝ[illegible]

さゝなみ 月なし

横川 山なし

須磨の浦 明かんの浦 栗津の原

松浦姫 大井の里 浮橋の原

白川の関 張り

高津の宮 淀川 海の面をゆくといふ心なり

しろの浦 渡川 三瀬川 玉の浦 浮橋

夢の浦 橋 菅原 蓮原 青葉

色あるを仮名拍の若しやうけの若や 水のうへ

[illegible] 水のうへ

[illegible] 笹 のうへ

竹の玉 月 月のかゝる 瀬 宮 月なし

小田原

苗代 水苗 小田の村 まへ以てハ此季の題也小田の村まへ以てハ山類と二処也

菅 袖ひく季 鋼の海 硯 水

布ほし 鹿の網 冬の季 冬よ季 四季

鳫 鶉 鷺 鴫 鴫ハ冬也とも季也にあらずとも秋季也にあらず物の季也

ちとりなどの季なし なり 蛍 日末 渕 瀬と構思ひ

まへ以て羽此季の題に 此こ伝自他共 しくれし しもさし

まへ以て網つへこんすしてみしさとひしけり ありつたる題にわたらとなり

○十一 所用之事

○山類 所之季

峯 高嶺 嶽 巣 洞 尾上 岨

麓 坂 谷 滝 山に 立ち 開ちしかれ

富士 浅間 葛城 まへ以山類所用之季なるし とハいはい山類の所如くこ之也

用ふる分

澎 杣 林 林 炭 竈 ゝと用や

水邊所ふる分

海浦 江 澪 堤 清 汚 與 礒

干 潟 岸 汀 江 河 池 泉 洲

渫 瀨 瀧 澪 津 とゝひて と用る

用ふる分

浪 氷 氷 堤 池 堀 手 洗 ゝ 渠

閼 伽 井 清 ゝ ゝとゝひて と用ふ

所用ふる外

浮 木 船 流 堤 屋 堤 物 ゝゝの如

蛙 杜 若 菖 蒲 菖 蓮 蓮 葦

海藻 和布藻 海人
藻 網 釣 竿 筌 下 樋 筏
竹 竹の皮 竹の皮にて作る
居而作る
竹 籠 篭 簀 門 戸 柵
蓙 礫 灘 垣

用る
庭 外面 籠
周囲の居所に二百垣 柳用る物 不垣用の
板底にして居所に二百垣
又云 窗戸 又居る 窗あり 置物 沖潮
居所にわるる

雜物作用る事
俗名 長と云ふ 付く又引る 付
長と云ふ 光用る 加来と云 付 光

所ある哉と打越所なくハ又あて所出ト云夕縄
ト付て又疑ニ不付ニ所ある哉しくるへき
ハ可付ニ先用ニ以てよき詞ニと兼て老
又所続ありさるよらハ所ありけるなと
来ても疑ミある用なり動目かね迷ふると
いふ

又云　植物生類木草なとハ一連も二句つゝくへし化
所用ニ此外の物ハ三句を許し三句つゝくへし
三句つゝきんる所用のつまり能合はとして濡ト
付く又ある二ハ付合つゝと用の中ニ所へと云ふ
之哉なり若しある通ふ橋なるの所用しあるなる物
そ付へしる名利物なり又所の中へ用ニ入る

又或所用ニ用所動所ハ用用所と続くも
し

○十二可備三句物

月ト　日　星　此外ニ天象ニ同　雨ト　露　霜ト
雪　霧　此外ニ降物　霰　雲　烟
花ニ降物　木ト　草　虫ニ　鳥　魚ト　獣
名所ト　名所　有名ト　月　日　但月星ハ名所なり

十三可通古今物

月字 日ト日 風ト風 雲ト雲

煙ト烟 野ト野 山ト山 海ト海

浦波ト波 水ト水 船ト船 舟ト舟

木ト木 草ト草 鳥ト鳥 獣ト獣

出ト出 恋ト恋 情ト情 涙ト涙

袖 衣裳ト衣裳 山ト山 山の名

海ト海 海の名 原ト原 松原 篠原

花桜ト桜 可通古今物

十四可通古今物

同季月ト月　松ト松　竹ト竹　弁
田ト田　衣ト衣　雪ト雪　源ト
源　舟ト舟　弁字ニ　玉盤　弁玉
川弁可陽　七夕　山字ニ弁山
弁字可陽
字
衣字ニ弁の衣織女ニ陽七夕　紙ニ
川弁ノ紙衣ノ字ニ可陽

松字　青松　松浦山ニ
月ニ
田字ニ生田　田上　落田
松ニ月
竹字　竹田竹川ニ竹ニ陽
ニ陽
枕　枕月七夕ニ
千太　面八句　月十句ニ内可陽千
数句　数の内ニ書籍ニ切紙ヲ引テ
更紙ニ陽
腸句　ちさのミ　ちさの命ニ陽ニ仕数
ニ弁ニ　又ニ和ニ

古事もくるしからして雪月花の時にも新たに
ついゑならやましと思しけりなとあるをの竹脇
白に不似合をも出すとのなかれる文字多く
ニ説あるにとわり

井三 ちりし古きの和歌なとの事にて絶眠
そのくへを見るに一統にて御しく仕立ちりと
その人そてなる字すとにくからうし事も
わうらく露遊にて当らんと帰りたら思し

思ひめ ちりいつみすつうてをんしてくと
なるちうるい両の出会代風うるとてわ

新愚 仕ニするちう思し、仕様の白いふ吉字
トニ 字も様うらんなりしかうせくうわ

世の字葉乃中をてくさむ事 あるの重様御ささ

新二推文 うきの中なる事も両ニハ無用とよ
統を仕なしうるとそもいふなり

老私 うきてのまも思し、これふりかなそうし
初ね事ニ無用といふなり

御第生 つましくうきハ明するの内にて統
他しなり

毒 とこるニ当しさひらしうきまするし、
方川合て名所ニある歌に

聞 るなや露うきの内まもの名所ニまされ
二ますなるの内為云益いなり

堂塔法報又ハ家ノ内ニ服ヲ脱ク事
紙ニ墨ノ脚ヲ付ケタルヲ云フ

紙帷子ノ事 白キ麻ニテ作ル紙ヲ
又ハ布ノ服 又ハ布ニテ作リ紙ヲ
ヒキ光沢ヲ出シ多ク用ヒタリ

巡礼 ニ大笠ヲ被リ白装束ヲ
服ス笠ニハ代ハリ表ニ仏神ヲ
帝ノ書 帝ノ書タル所ノ書ヲ
表ニ彫リ紙ニ墨ヲ塗リ懐中
ニ入ル

事ヲ仕ル事ヲ云フ
生薬ヲ煎ジ用ル事ヲ煎ル
タクラウ事ヲ申ス

折 ノ字ニ似タルモノ中ニ
ヲ面ニ二ツ付ル二ツ曲テ
同字 面ハ曲ル九日ヨリ九日ヨリ
ヨリ九日ヨリ

凡 トヲ長クスルヲ凡ハ
ヒ人ノ名ノ上ニ付ル
面ノ上ニ山ヲ付ル

[illegible]

祝言

[illegible]

面の写

[illegible]

十六梅廻事

薫

[illegible]

白

[illegible]

焼

[illegible]

夕立

[illegible]

雪

[illegible]

夢

[illegible]

[illegible]

[illegible]

○遠梅廻る事

[illegible]

又云 [illegible]

[illegible]

○十七廻羽る事

○春之分

[illegible]

[illegible]

[illegible]

梅の宮　小柳　むの小柳　[illegible]

その梅　花梅　梅の枝垂　白梅

緑のかりの月　かりの月　[illegible]

かりの秋　[illegible]

夏こ[illegible]

夏菊　夏[illegible]

青木立　青楓　青梅　梅の[illegible]

[illegible]

雲の峯　さのこの[illegible]

蜩　やしの蔭　蚊火燒

蜩　[illegible]

[illegible]

蜩の[illegible]　初蝉

[illegible]

[illegible]

やまとさくら　花の木

人間　世間のうき世

秋川　秋のかわ

秋くれ分

秋白　秋風　秋の風

秋の白　菊と　菊の花

月夜雁　月夜に雁

わすれぬ月

わさ月　八月　四つの月　四季　四つの季

雨を山田　雨を山田

霧雨　霧の雨

霧ら　霧む　霧ら　霧む　霧に霧

霧の之分

霧の風

霧の月　霧の月　霧月

霧の風　霧の風　霧の風

冬梅　冬部　題詠場　[illegible]

[illegible]　[illegible]　山[illegible]　[illegible]

小春　[illegible]　[illegible]　源兼

宮内卿　大雪　[illegible]

恋[illegible]分　恋い[illegible]

恋ん　恋の[illegible]　恋の世　恋[illegible]

[illegible]　我恋い　[illegible]

中の文　思ひ人　思ひ寄　わく情

わく涙　雪寄　思ひ寄　思文

思[illegible]　[illegible]

[illegible]の　[illegible]　いはそりん

[illegible]二[illegible]　[illegible]文　わく[illegible]

かつら　いとかの　はぎ
綿木　ゆふ　弟　弟
[illegible]

梅　うめ

梅ヶ里　梅ヶ　梅ヶ　たつ里
金屋　門　[illegible]　で

山　やま

山寺　[illegible]　山嵐　山
[illegible]
[illegible]　深山里　外山　若里
芳野　蒜　[illegible]
[illegible]　[illegible]

水田　水石　[illegible]

みち堀　堀　堀　堀
ふかさて　ふかい　深い
うるけ　里　舟　夕舟
あらもわ　あさい　浅い
海　浦　海人
海　海　海岡　海風
伏見川　入江田
池　浪　波
○雜
秋風　秋風　秋風　秋風
ちいさい　小さい
とい　うれい　市
鶴　鶴の子　鶴

[illegible]の[illegible]　墨　[illegible]（[illegible]）　[illegible]

[illegible]の[illegible]　墨田　[illegible]　墨

[illegible]　[illegible]　墨

[illegible]　[illegible]　人　墨　[illegible]　墨

[illegible]　[illegible]　[illegible]

[illegible]　[illegible]　[illegible]（世と[illegible]）

[illegible]　[illegible]　[illegible]

友とら　[illegible]の[illegible]　年[illegible]　[illegible]

[illegible]の[illegible]

[illegible]

[illegible]　[illegible]　[illegible]（[illegible]）　墨

[illegible]

田の[illegible]　田の[illegible]　野田　入[illegible]

[illegible]

[illegible]の[illegible]　[illegible]　[illegible]

[illegible]の[illegible]　[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

月雨　時雨　村雨　此言　この

[illegible]

上の句の　[illegible]

下の句　[illegible]

[illegible]　入れ　月　月の出の

[illegible]

[illegible]　花女郎花　地引　[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

十八 可思惟事

儒道釋哥

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

長夏　その月の白く秋の白く作る事あるべき
月の用ゐてはべるべきなり
うくやはれとつまるてはべるべき
そなたいらるべき事なり

はるき　と云ふ事はるとは詞集者の
中にはいまだ人とて歌に作るとを
わる書にはけりとは書いたれとも象
一字とはいはるるなるべしかるべきとなり

長閑　物の所さのこころもとなくと義
下文にはけりと人訳を人のた
らるものの比をはすべし又義のたにをえあと
又所又い度凡は悲するにはいたれとこ

が人なるべきにはあらざるべしゆゑにやさ
くに風雅をのこの海の意
老松の白い　幼少の時のんぢの一作の光
なるべしとあるとやはしも
なるにはあらざるべしのつきそ
あるにはあらざるべしの白い老の白に不付合ト古人の
意別にわり見侍るべしてはべる
入くに浮世の中わるにはいとうるはし
りのうり

時雨にはあらざるこの事
先物義乃窮理のうにたるひを口ひらくこと
はなの梅の咲るにはいとうるはしの

[illegible]

[illegible]

[illegible]

加藤[illegible]の[illegible]不[illegible]未[illegible]はいく[illegible]
ばけ、[illegible]と[illegible]と[illegible]と[illegible]義[illegible]風[illegible]

古今　新古と俳諧物語の人一首[illegible]
[illegible]ん[illegible]自[illegible]一[illegible]

武蔵野　[illegible]
[illegible]
[illegible]

次麿の[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]この[illegible]の[illegible]代の和歌
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]の[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

花をたて家にはべりとあはせにうたはる
事用ひ
柳
[illegible]
野の
[illegible]
[illegible]
家
[illegible]
[illegible]
落葉
[illegible]
[illegible]
[illegible]

十九　春日切事

おぐるすりや　まつやそ　ちい
きめたいいたく　いつこいたま
いそ　さ　ゆのそ　ゆ　けま
りふし　いか　又　ちえ　そ　ふ　ふ
ぬ切　ま　う　花　の　ち　ま　風　り　か

ほひより　ふそのや　ま人なまや
はうぞ　心ま　ふ　そのおうのしふ
うみ　きうさう　れ　ま　ひ　ま
とと　う　ぬ　ま　ひ　ま
いたこ　ま　ま　れ　い　く　花　い　ま
こそ　ほう　ま　ま　ま　ま　ま　ま

月うつる

こいかな

芝ちり又下ぬしなる鹿の

月うつけ　ゆきとよ　杉ち　嶋か

明るとて　人せそ　おかへ　ちと

きれ　とと下ぬ　や

ちらん　ぬるらん　ぬるうの数まれる事

うう

六ほう　月おもと切字うう　ふの数なし

名道の下ぬ　ぬうう

又西ゝ月ゝ切字

青面ゝ月ゝの松風　春の雨

花ひと柳　ゆうとと　ゆ　風

さ言ゝ所ゝ　ゆうう　面白ゝ　ぬ人ゝ

もるひとと　世ゝ

花のさかり　ゆとと　ゆ　や　うとと書　ぬう

ゆ　一日　ぬ事

さゆうとまくと書わくこと
百絵おやうの一字二字にて切字の為也
そもそもとて書きわの為にて引いつへき
引いたやうにもいまくもと書作り

二十句数之事

表 秋 恋 雑 三句ずつ表裏の句
恋の句三句ずつ雑の句一句
かくと

裏 夏 冬 旅 神祇 釋教 一句にて表裏
句まてとをなし

述懷 雑歌 常世 山 と述懷に田舎常世
は三句ずつ山は三句をなし
恋の句ずつ述懷雑歌常世
山数の句指ぶと山と述懷に田舎常世
句数事一句ずつにて二句
ずつを数

人倫 二句に不表三句
しら人倫に二句ずつ

強句 二句ずつ強句にて三句
くをなして 雑歌 釋教 杜井也 湯也

三代集撰ばれなくとも歌にきこえたる
ものなれば撰ばれたるもの
多くなりぬべきなり

生れてこのかた二百余年
の間に撰ばれたる歌
の名三百余

一代集撰ばれ撰ばれ
ぬるもの多くなりぬ他撰用し他
人の歌をもこれを用ひ
ぬる例の様のごとくなるべ
し

かつは後の人の歌の撰ばれて新たに
とりいだされたる歌の中にも
なほ撰ばれぬ歌多くして
なほ撰ばれぬ歌多くして
又撰ばれたるもの多くして
撰ばれたるもの多くして
人のうたいまだ撰ばれぬ歌
撰ばれぬ歌多くして
撰ばれたるもの
撰ばれたるもの

撰集撰ばれ撰集
撰ばれたる歌
撰ばれたる歌
撰ばれたる歌

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]
二ツ折りにして懷帋と称し
二ツ折りにして大略硯のうへ[illegible]
に[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

三ゝい　長座ゝ海棠あけぼの趣

四ゝい　杯合とりかんこ製作ぶり

五ゝい　雪月花の三ツを心ゝく趣

六ゝい　宗匠共人ゝ実ゝ作ゝし

七ゝい　清光　枝高ク月ヲ宿ス

八ゝい　懐帝西ヲ紀ル　嘗色

九ゝい　大常三綱を心ゝけ廉勤ゝ

十ゝい　法度形儀ゝ

[illegible]　菓子ゝ色ゝ茶

[illegible]　色ゝ

[illegible]

[illegible]

[illegible]　杯合とて

[illegible]
[illegible]
[illegible]

事しるしたるこゝろいたりて事なるもの
を宗長わりひいとりまうしの氣をそんせさせ給
わるけりとうり給ふ紙にかきをりて
わきうりをとしたるこゝろを殺生の無とりよ
りさいうをとゝろひるの方俗うりとる
乃俗うまうの重ねかきうつきて屑をも
もしたるこゝろ不殺物筆に書けるまての
俗をうるこゝろ自然のこゝろの味まてを
筆にもの中庭に物筆もの事親を捨
門徒庭の門外に庭にとゝ上庭(ひろのこと)
又千日の物筆を若列のさもの紙を出法
わまりもこゝろ有明のこゝろ

又云 執業十種信用之事

高位眼近 若人値遇 所と為る

少数為媒 美徳一 不利足禄

文明世語 文友の慰 自通彼意

只願成仏

彼なつひと人なのつ徳業とたる

学道に信心一日の一瓢をして百徳を

書時老子儒道とをえ心をたくうちを

はうちうしひうしさうを学ぶ仏入さうにもちく

人界の生をはうしてさけ和国の学を

ふさとりのうり

時三一産と法度寺

数句

一度眞行の
末葉山寺の
[illegible]
[illegible]
[illegible]

人丸　ト述懷とひとしき句い人丸の句

述懷　こ舊い古常　此こ川崎て三句をもて
てをかくそしをもて人丸の述懷と二句をもて
の句一句をもて合こ二句とをもてつ

述懷　こ舊い古常　新傳出の句　つをもて句
方日おうう加うう

述懷　こ舊　懷旧　おうう　人丸述懷の句をもて
懷旧　おうう　新と一をを用ひ

述懷　ト　述懷と懷旧と句意の句をもて
仏作ら　ら　ら　きく　かく　をもて　句をもて
所部述懷　をもて　紙　ら　む人の作れ者をいふ
句　作句　ひを　風　者　の　ら　じ　へき作　わ　ら

四季の句　ト述懷の句　入　たく　い述懷　句　り　を
ら　者　祇　恵　出　句

平秋　の句　恵の秋の句　付く　又平秋の句　恵
付　表　ト　日　句

雪月花　日　仏　言　を　を　く　又花　を　を　人　を
形　を　く　く　し　言月花　恵　句の
肝心風雅の命魂　句　を一座の者人　者人
が重上　を　を　人　ら　ら　ら　ら　ら　ら

[illegible]

[illegible]

[illegible]

○会席作法之事

其席小野宮殿御尔ハ行ひ給ふ事

前ハ文ちらしの硯箱と古今抄

ゆ[illegible]ハ[illegible]ハ内ハ書籍和漢古事

をしんしたる[illegible]ひ給ふ[illegible]

衣裳をとゝのひ給ふ[illegible]

[illegible]

早旁[illegible]人者[illegible]

月ごろあやしいくゝり[illegible]

[illegible]

中に光孝白梅をおもしろ[illegible]

と[illegible]

庭の松ばかり書人の見うを用給うと初て
見うとて是にて月ばかりすみ給ふとて
わくひ大酒大食庭家とそけくこれ半分と
こしたるみ初て人の年1ふりてんとうか
と事又ひくく出て此筆1ふひくなる
事わつらはしくまくひきつかうの
の人まくわをちゆくまくひきつかう
たとうりてさくしきと用給ふ所と
狼藉を給ふり出乃所を紀乃
色1うくしらうとるさとの所1ふくそい
へとも此樣とこのやうにわさとい人の
ふふらみくたらまくおといさ樣

[illegible]

[illegible]

[illegible]

宗匠共人々を名列の事なり月花の
ゝる物笑をしらく侍らいとそるふし
ゝ侍事もわる紙〳〵をゝい人の分とやすく
我分ゝゝ秀逸おゝ侍らはゝ*おそ色の
ゝゝ我分一人の分きんゐ歌とゝ
色ゝゝ我分をワ物ゝ此ゝ色ゝゝ

ロを用色〳〵未座〳〵て書月花とゆ事又
いきをなを石清こゝゝ初
三津淋川ロのゝ車ゝ
殘古語ゝゝ毎度一ゝ
ゝのゝ車ゝ初人分ゝ
なゝゝきゝ色ゝ和分のゝ

ふたくしかるべきやうとつくるうちに博学の
胸うちやりきこえ頭すとといひおきたれ
ども白く作り前にもたれ人切をなすとの
一説まことにはたわんけんにたるすうとく
おもしろい花実うりか備へ長わるめうち
又作じたきうるに学問をするの中に

ゆゑ毎度一作まつ月例のうわうていて
作くさ作くきりのうりなめて付てもおこた
らうりくたうと作いうて色とけてかるて
どっうんかたる品いてさらん不絶也ろと大ろ
作くまつりおりて年ちやうしるたん
人〻稽古するみ作る事をんてをさうを時

[illegible]

月花の如くに一句長句人に分ち

[illegible]人上のものにまちまち合を分やとき[illegible]

[illegible]人[illegible]に対する[illegible]一句毎に

[illegible]仕[illegible]

[illegible]

[illegible]

但雨嵐ハ略ス和漢共可用ト云
雨ト項雨ヲあつぴ嵐ト云嵐山ヲ云
て二の字ハ共ニ云フ可用
格多シ

一万物美ノ絶ル所可定其季ニ為ル
所事新式目ノ和漢第三心ハ実ノ行
極ル事ヲ本所ト云フ事ヲ定ル
ハ云フ所ノ外ニ又用ル云フ
ル所の外ニ又用ル云フ

假令金鶏ハ日天象ニハ可属其義ニハ
為ス但二句可属ル云フ可係句所
銀竹ハ雨生殖ニ百姓但竹ノ字ハ可

短句

金衣の鸎　花の衣に深紅をそめなす　可短句

鳥衣の燕　花の下に短衣

霜蹄の馬　霜ト云ヒ蹄ト云ヒ不二必深切不可

疎の鐘　句作不一定

一一座一句物

詩鬼と称す　李白詩式目録に不及載

洞庭玉壺春　光物ちく万古もの哭ん一句

一二句　可替折

春風　松風ちくを詩式目録に不及載

桑　絮ト柳　替折　二角ち若ク紫の若引ち事ト也

坂若　海湖海江　堤渚　磯沼

一三句物　可替折

紅葉　文ゝ敷　新式目

宮　宮居ニ一枚織ニ一文字ヲ名ヲ名ヲ一ツトシテ名ヲ名ヲ一ツ三ツ

一四句物　可替折

花雪玉　空　名ヲ出ス事列不及注也

一五句物　一ハ替面ニ名ヲ

世梅

一春部

新正　歳ノ首月也

淑氣　春ノ気ノ中ニ九州淑氣催黄香ヲ

管律　黄帝作律以管為律

貢茶　顔渚　貢茶　十下

繁　柳ノ変也　暖　花ノ心ヲ

紅月前　踏青　青草ヲ踏ム心也

芳草　芳草ノ変也　燒痕　萩ノ燒原ヲト心ス

鶯鶏　鶯鶏啼立深花裡ト云リ

蜂　但可信白祈反　山梨　山梨ノ花也

一夏部

新緑　新樹月事也　清和　月ノ事也

霖　雨日以往為霖雨ノ変也

黄梅　梅ノ熟也　黄雨　黄梅ノ時雨也

白雨　夕立ノ雨　麦秋　麦ノ熟スル時ヲ云リ

雲峯　夏雲多シテ峯ヲト云ル　薫風　薫風南ヨリ来ル

一穐部

初凉　新涼月中也

殘暑

金氣　秋ノ金ノ氣ナル故ニ

爽　秋サハヤカナル心ナリ

懸瓠　子夏衣若懸瓠トヒとり

辛扇　扇置

荔枝　六月南国荔枝丹

黄柳　秋柳也

盃嘉落帽　九月九日ニ云ヒ変也

一冬部

凍柳　冬ノ柳也

凍蝶　凍蝶ヒ衣トヒとり

枯　芋ノ心也生強ニ焦ニ与

探梅　熟早梅心

春信　割取丘菊春信ヒ衣トヒとり

守歳　唐李歳初屯渭橋守歳人トヒとり

爆竹　爆竹孫ヒ鬼トヒとり

雛　雛ナヤラウ色トヒとり

一山類

雪山　雪山ノ大言山ハ地山ハ高山ノ高山ノ事ナリ

峒山　山ノ名也　岌嶪　山ノ名也　岌ト斗ハ峒山ノ名ナリ

一水色

湖鏡　江湖ノ事也　灣　水曲也

一絲　糸色也　鉤　月前

業海　業色也　硯池　月ノ色ニ比ス多シ

一釋教

禪　禪定　入定　錫　錫杖

經儒　祖師ノ名

一述懷

名利　名ヲ思利ヲ貪ル事

浮跡　裏顔　白髮　世ノ心也

扶老　鉤名

隱逃　退蹟　葉

一意部

錦字詩　沸海葉　私語　閨愁

曉粧　鼓　美人　別字　紙色ハ一ニ紙ヲ色惡シ

鴛鴦衾衣　古衾衣　古枕　粧　鏡

此字ハ偏非惡トモ紙不得也ニ成ルヤ

上陽人　楊貴妃　長恨歌　又治百首入部部年

一旅人

信　書信日本　客　客人　賓客　賓客

遠鄉　鄉夢　一葉身　漂泊　形

征人　故山　旅　白字　丁使ヲ所

一人偏

公侯 伯子男 之是也五等諸侯也

士 庶 之人倫也人之人倫也

帝王 祖師 若 松菊 竹友 姓 之是也 女人倫

一 文財

顔 髮 必此外也人倫

一 生殖

梅雪 梅暑 葉雨 杏酒 菊海

桃花酒 桃花浪 之生殖也

鶴林 柊枯 伐木 藤杖 桃花馬

桃花粥 桃簟 蔡 美美 嚼瓜

藥 合蘭 燒香 之也生殖

一 非夜分類

被暗春如夢　胡蝶夢

一付句可媚詞

玉章ニ詞　清夫　帰ニ別ちく故

如ちの若ちト色似　於是ちの斯

可ちの應　青ニ緑　蒼ホ　白ニ素　素ハ

一媚　折翅物〳〵　分月連歌

樵夫ニ　木字　顧ニ見字　ちく　鬱

一二句可隔物

月ト日　日ト星　多く天象ハ三句隔ル

朝ト夕　曙ト朝　多く替タル所ト

雨ト露　霜ト雪　長短ハ可

鳥ト獣　虫ト　多く長

木ト草　茂キ枝葉ノ生ル様ノ物

人倫ト人倫ノ方ノ用ヒ方ノ物ニシテ　意ニ　近思

一三句可隔物

山ト山　山ト山類　山ト峯ト峯ノ事ヤ

山ト　山トハ　月ト月　雪ヤ　雪ト雪　遠ト海ト江ト川ノ間ノ意　月ト月ヨリ

夜方ト　秋ト　木ト木　草ト草

獣ト獣　獣ノ類ヒ　夜ト夜　夜ト夜　月ト月

月ト月　月ト月　月ト月　月ト月　月ト月　月ト月　月ト月

一五句可隔物

月ト月　紙　紙　秋　述懷　恋　旅

月　船　船ト　恋ニ隔ツ物ニ一隔ツ物

一七日可蒲物

月番ハ必速ニ可用ル

一句数事

春 櫂 夏 夏月前

秋 秋 秋 秋 秋 山 山

冬 冬 冬 冬 冬 海

雑物 人倫 ことわり

国名 名所 名所 名所 名所 名所

一十句ハ月禁制物 必重寄

不詳字 人名ハ

一一座一句ハ和漢共書 呼名ヘシ

二句ハ物ハ一充ヘシ

一花二本元多ク人ニ自事ニ高ク大方作ル

一俳漢ニハ漢ノ方ニ可有韻字

漢和ニハ和漢共ニ可ニ韻字

一百韻ナラハ漢五十句 和五十句多ク人ニ

但古懐ニ多少ニ

一懐句ニハ作者ニ懐ト云ヲ記ス作者可

為必連歌 五十年以来懐ナク

一和漢ニハ発句可為漢 漢和ニハ一句和句

休紙 居不ニ書ル 伊呂葉ノ中ニ書ル

右之箇条記ス可守連歌式目法

度之中

此下書ハ寛正七年ニ記ス

記を用ゐ年号を乃治等葉と紙色法服
の板見て文くやまと武文と用ゐる事を接合と
そけ格を成けけり月格の紙とくるを
わまと風雅を本食器を衣乃器にわるを
にくらく十を集めて蟲魚の極とを
任四老さ書を章巻にさけるを也

わひをよかを海にしるわて函底を制共
中書を修正板完をを板色千村情
人編にをしをを流布を移をを
文獄書文の舊年を破乃巻設他乃
新書を用ゐいをを一年正月上漸清
ゑ一二三子にわ人ていく巻他見を

中ケ瀬と釈門に入て三年程なるを人儒
道に影くい志深ければ
いと祝師に暇を乞て
年ゞ昼寝祝鶴の年侮のごとく時日を
うつむしに わさ海老乃花の咲わたる秋
の夢 ほとゝぎす 思慕の うらまとゝ
ていたしう後の書に 生涯
に顕沖に妄念をとゝ 俳和らりも
きい 時 ゆめ 言 仲 上乃百世と
ゝく山に入 様菓汲 の功一十三年寺社
際 い十一 高野山の星霜廿五天
齢 六十二の 榮 に 茶

おりんみちの経歴はいと浮世の
間一夢とのみ一息の絶うるを
乃ち生滅盛衰乃ち楽極悲生始
一瞬にいとあわれとは再世前年
秋はや秋乃ち春にかへりて代々
とゝもとやとうつる夏草とうち始く筆とり
海人清書持油のわりつき　新さん下書い
夢のうくみおとつるる夢思わり夢とおこと
夢と覚るなかおとと浮橋のわりくらと世とはか
ゆるねうけさうつひゆくと海藻書うし
時ゆうりわく一日のそのこゝろ一念つきひ
ゆひと人と勧善懲悪のたとこと行ふ

法隆寺東山大佛殿奥院樹下にて寛永
年間世尊の説法を記してわさを
いとひけるを有為のたとへとして三
業をはげしく不善をすてゝ精進
し阿字観法本不生乃至りに住して

南山元食法用

世尊滅後乃至末代乃至衆生の為
興山上人法華経海の海に入さし
給ふ文殊の大師まれ乃至仏門者を入れ
わと称金堂大塔をかまへ給ふの法生の
月東方の塔と如来涅槃の大佛供養の行精
山ゆりをとりとりて乃至りに住して

[illegible]

[illegible]

[illegible]

面授　叡旨仰感不斜　有馮道

仁　勅定漆筆ものや

寛長三年　二品親王実性　御出家

世之外題也　被海勅筆

并大覚寺殿　二品親王御奥書也

一冊　上人伝法灌頂記　二帖

寛元年神宮自筆

法服袈裟　作判

出一部愚老校合　校合と断末也

ものぬしの二位の殿　残命のかぎり

ゆゆしき人の法の道　文也

そんぢをしてわるくにおもひ
やわの秋の晩景をつくしたと
ゆくえをしれとうたをかたて
かうきいたす相手
ひとりぬるく
慶長四年十二月八日　應其上人判